

木村文助研究

通信

14号 2006年11月9日

新大野町史発刊 木村文助・綴り方載る

新大野町史がこのほど発刊され木村文助の大野小綴り方実践が各編に載った。思えば木村の実践が北海道教育史で大きな評価があつたにもかかわらず前大野町史では教育編で間接的に触れられただけで町民に知らされてはいなかつた。また彼の活動が地元でまともな検証されることもなかつた。

赤い鳥・生活綴り方・木村文助についてはぶんぽけんの活動でようやく掘り起こされ、新聞、町広報などでも報ぜられ徐々に町民に浸透していった。また砂原町史で一足先にまとめられ、今回の新大野町史の内容に盛り込まれたことで教育編は勿論、文化・文化財編で詳しく紹介され彼の業績評価に大きな区切りがついたといっても過言でない。

「教育」、大野小学校の項には「生活綴り方『赤い鳥』で高い評価を」のタイトルで木村の指導実践が載り「村の子供」に寄せた鈴木三重吉の序文も記された。

「文化・文化財」、大野町文化財保護研究会活動の項で「生活綴り方の掘り起こし」の詳しい様子や「赤い鳥」復刻版展示会が広報おおのに報じられたことも載った。さらに全一ページを割き「赤い鳥」に載った自由画も含め入選作の氏名、題名が全部盛られた。

二〇〇六

四・六 木村文助研究通信13号発行

四・一五 川崎市志村章子氏郷土資料館

(「赤い鳥・木村文助コーナー」来館及び木村墓所(森町)献花

六・一 札幌小学校松野萌先生より卒論「北海道生活綴り方の先駆者

六・一 札幌小学校松野萌先生より卒論「北海道生活綴り方の先駆者

木村文助の実践」届く

六・四 北斗市郷土資料館紹介「木村文助や赤い鳥にも触れる」

(函館新聞)

六・二六 東京農大榎本隆充先生、朝日新聞社高成田享氏、郷土資

料館(「赤い鳥・木村文助コーナー」来館

六・三〇 新大野町史発刊

七・一二 東京音大武石みどり先生、郷土資料館(「赤い鳥・木村文

助コーナー」来館

七・八 「児童雑誌展」(函館図書館)(7/29〜8/18)に赤い鳥・

木村文助が紹介される

九・二一 「木村文助」年表作成(木下会員)

九・二三 「北斗市の歴史を後世に伝えるために」(北斗市教育広報)

表紙記事に赤い鳥・つづり方・木村文助が触れられる

九・二七 木村文助元校長の年表完成 作文指導の功績ひと目で(函

館新聞)

一〇・二三 札幌市平中忠信氏より木村文助勤務の札幌一中校写真

届く



右の手

北海道亀田郡大野小高二

川口 良子

私は二つのとき、這つて行つて熱い湯の中に右の手を入れて火傷をしたので、すぐ医者にかかったそうですが、下手ものか、とうとう右の手が曲がつてしまいました。それが、手が痛いので曲がつていたのでそのまま包帯してあるうちに皮が付いて、とうとう曲がつたのだそうです。小さい頃には、それほど気にもかけませんでした。今は手の伸びるに従つて中の皮が縮まつてゆくのです。尋常五年の体操のとき、先生が「どうして手を上げない、こうして上げれ」と教えておりました。そのとき私は自分の手の曲がつているのも気づかず、自分も他人と同じように直ぐに上げていくものだと思つておりました。そのとき先生は教壇の上から、「こら、どうして手をしつかり伸ばさないとすかッ」とどなつた。はッと思つて自分の手を見れば、悲しいことに自分の手は曲がつているのであつた。私は悲しくて悲しくて、それから二三日は何を聞かれても、自分は覚えていながら手を上げなかつた。

高等科に入つてからも、私の手の曲がつているのを知らない人は珍らしそうに聞く人もあり、また何か伝染する病のように思つて隔てる人もありました。

私は知らぬふりをして遊んでいましたが、手毯をつくときなどに人が沢山たかれば恥ずかしいような気がして顔がほてつています。凝念(精神統一や正しい姿勢、身体の鍛錬を目的に行われた大野

小学校の気合いの入つた学校行事の一つのときに先生が、右手を上げれとか、左手を上げれとか言いますが、そのときも私は恥ずかしくて、そつと低く上げておりました。左の手を上げれば、何も言われぬ恥ずかしさと悲しみが湧いて来るのです。その内に、後ろの方で笑うような声がしました。

私は自分の手を笑っているかと思つて、ぎつしり手を握つてしましました。暫くするうちに、男生が私の手に気がついたものか、隣をつつき、向こうをつつきして、私の手を見てくすくす笑っているのです。

私は手を下ろせば先生に叱られるし、上げれば笑われるしと思つて、手を上げたり下げたりしておりました。その間も絶えず先生に叱られるはしないかとはかはかしておりました。いいあんばいに見つけられずに、それですみました。

(大正十一年十月号)

川口さんの「右の手」は、女の子としてきまり悪がる心持が哀れなほどよく写されております。他の子たちが伝染でもするように逃げ隠れするのはあんまりですね。

しかし川口さんも、そういうまでも恥ずかしがったところで仕方ありません。全然平気になっておしまいなさい。(赤い鳥)

文はなかなか力のこもつたものですが、考え方はこれでいいでしょうか。少女時代のことだから恥ずかしがるのも無理はありませんが、自分の過失でも罪悪でもないのですから、少し心を大きく持てばなんでもない

ことです。いや作者は恥ずかしいと書いてあるけれども、こうした文に綴るところなどから次第に恥ずかしくなくなりつつあると思われます。
文を綴ることによって、こうした考察から人はだんだん眼が覚めていくくだらぬことには萎縮しない、大きい強い公明な、人を恐れぬ力がぐんぐん育つていくと思います。(木村)

酒飲み

北海道亀田郡大野小高一

村本 金彌

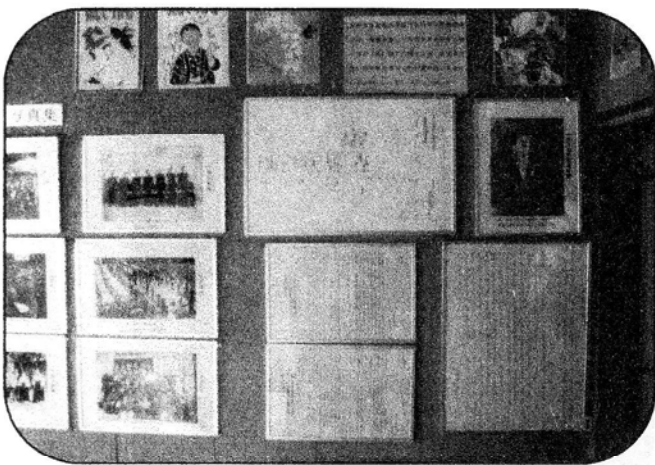
ある日、僕は学校から帰って来たたら、僕の家の中に席をしいて寝ている人がいた。僕はびっくりして側へ寄って見ると、「へどをあげてぐうぐうと唸って苦しんでいるのであった。家の前に聞くと「その人はさつき店へ行って酒を飲んできて、家の前に寝て、雪が顔にかかって真っ赤になっていたしけ、家の中に入れて寝させたんだ」と言いました。そして「へどの中に三十一銭入っている」と言いました。

しばらくたつと眼が覚めたか、起きて自分のへどを見て、唾を吐いていた。水で口をすすげば治るだろうと僕は思っていました。それからまた眠り始めました。そして何べんも眼を覚ましては唾をしていたが、しほまには起きて頭を下げて「これ、たのむ、たのむ」と言つて停車場の方へ行ってしまいました。
僕も停車場へ行ってみたらまだ酔っていて、切符を売る人に「そ

ら三十一銭、切符をよこせ」と叫んでいました。それから、そばの台の上に伏せてまた寝始めました。僕は家に帰つてきました。
翌日学校から帰つてくると、酒飲みは「どうも失礼しました」とわびをして「昨日ここにハガキがありませんでしたか」と言つていた。「三十一銭ありませんでしたか」とも言ったので「昨日停車場へ行ってみたら『三十一銭だべ、切符よこせ』なんていばつてあったぞ」と言つと「そうでしたか」と答えて笑っていました。

(大正十二年四月号)

年級から言えばたどたどしい書き方で、さほど感心する程ではありませんが、その代わりどこまでもうぶうぶしい純粹なところがいい気持ちです。(赤い鳥)



資料閲覧(赤い鳥・木村文助コーナー)

「北斗市郷土資料館」

旧町市街地に入り大野小学校の校門を入って右側、木造の建物です。

〇四一―一二〇一

北海道北斗市本町二〇〇

TEL (〇一三八) 七七・六六八―

開館；九・〇〇〇―一二・〇〇〇

一三・〇〇〇―一六・〇〇〇

(郷土資料館係が対応します)

・ 休館日もありますので遠方の方は事前に連絡ください。

・ 函館方面↓車で、国道二二七号に入り旧大野町市街地まで、20～30分。

・ 道北方面↓車で、国道五号の大沼トンネルを抜け、一〇分ほどして

大野方向に入って右折し、更に市街地を進み五分で着きます。



編集・作成；会報委員会

木下寿実夫、国塚妙子、古俣芳衛、

小松真之、島津昌二

発行；大野文化財保護研究会

(略称；文保研・ぶんぼけん)

〇四一―一二〇一

北海道北斗市本町六八

会長 木下 寿実夫

(〇一三八) 七七・八五三五